

コロナと国難



新型コロナウイルスの感染拡大は、グローバル時代の災禍・災害として考えなくてはならない。「コロナ・ショック」は日本でも大きな混乱をもたらしているが、安倍政権の対応は後手続きで頼りない。そんな時、朝日新聞3月25日朝刊の高橋純子編集委員「多事奏論」を読んだ。「引込み思案」じゃ困ります、と安倍首相にもの申している。同感することが多いので、途中から紹介したい。写真は同紙24日掲載、安倍首相の記者会見(2月29日)。

先月27日、首相は突然宣言した。「全ての小中学校、高校、特別支援学校に、来週から臨時休校を要請します」休校要請を知った時、2人の子を持つ同僚は足の力が抜け、下の子と手をつないだまま、その場にストンとへたり込んでしまったという。仕事と育児の両立が難しいのはもとより、いい担任の先生と出会って、子どもの確かな成長を感じて喜んでいたのに、こんな形で絶たれてしまうのか、と。

私は不思議で仕方がない。これほど重大な判断を、首相はどのようにして会議の席で、紙を読み上げるような格好で、さらりと言っただけのけることができたのだろうか。すぐに会見を開いて、そう判断するに至った理由を説明し、言葉を尽くして理解と協力を求めたり、疑問に答えたりしようとは考えなかったのだろうか…と、とりあえず疑問形でつぶつてみたが、実はすっかり腑に落ちている。2014年、集団的自衛権の行使容認を表明する首相会見で示された、赤ちゃんを抱く母親に寄り添う子どものイラストを見た時、私は思った。薄っぺらな母子のイメージをこれほど雑に利用してのけるのは、女を、子を、そして子育てを、本当のところはナメているのだろうと。

「断腸の思いだ」。休校要請の翌々日によりやく開いた会見で首相は釈明したが、そんな2日前の日記を読み上げられたところでいったい何になるというのだ

あの日、多くの親たちが不安と困惑の渦に放り込まれた。経済的、社会的に厳しい立場にある人は、より激しい渦へと。それを「あとは自助努力でよろしく」とばかりに放置した首相は、一国のリーダーとしての資質を欠いていると言わざるを得ない。

首相はこの間、国民とのコミュニケーションに明らかに失敗している。下を向いて原稿を読むか、脇のプロンプターを見るか、この期に及んで国民と真上面から向き合っていない。「国難突破解散」だなんてかつては威勢よく危機を「演出」していたのに、本当の国難にあつてこの極度の引込み思案ぶりたるやどうだ。敵と味方を分かち、異論に耳を傾けず、「身内」を重用し、説明も説得も省いて「数の力」で押し切る、そんな「一強」の構成要素はいま皮肉にも「弱」の要素に反転している。「ワンチーム」なる言葉をあれほど空疎に響かせられるリーダーもそういないだろう。

鼻と口はマスクで覆いつつ、目を見開いてよくよく注視していこう。危機に際してこの国の為政者がどう振る舞ったか、しっかり記憶に刻んでおくのだ。

(2020年3月27日)